

# レイデオロ

## 有馬記念

6.8 - 11.6 - 11.8 - 11.9 - 12.2 - 12.8 - 12.6 - 12.2 - 11.6 - 11.8 - 11.8 - 12.2 - 12.9

前半-後半 3F : 36.2-36.9

前半-後半 5F : 60.7-60.3

当馬上り 3F : 35.4

稍重馬場で行われた有馬記念。前半からやや流れて平均気味のペースを中団外目からの競馬に。キセキがやや離れた先頭ですが、差は据え置きでほぼレースラップ通りの流れに。

ラスト 5F 最速の早仕掛けを外からついて行く、平均ペースからロンスパの非常にタフな競馬になったレースです。

結果的には少し前にいたブラストワンピースに差を詰め切れずの 2 着に終わりましたが、ここでも 1 番強いと言っても過言ではない内容。このタフなレース内容で後半要素も高いレベルでまとめてきました。

ブラストワンピースとの差は、斤量と道中の位置取り。当然道中の位置が逆ならば末脚の違ったと言えますが、その程度の微差で大きく後半要素が損なわれるタイプでないのは、過去戦績から証明済みですし、敗因はこの 2 点と断言していいでしょう。

当然ラスト 4F 最速を自分から動いて行ってというのが理想ですが、今回の展開はあまりないパターンなので評価を落とす要素はないです。

## オールカマー

12.6 - 10.6 - 12.7 - 12.3 - 12.3 - 11.7 - 11.8 - 11.9 - 11.8 - 11.5 - 12.0

前半-後半 3F : 35.9-35.3

前半-後半 5F : 60.5-59.0

当馬上り 3F : 34.3

秋東京は超高速馬場。前半後半のラップからスローペースである事がわかります。

レースラップは逃げたマイネルミラノのもので差は大きかったのも、ラップ以上にスローペースが事実上のペース。

中盤は先頭との差は変わらずでほぼレースラップ通り。ポイントはラスト 3F 地点。マイネルミラノとの差を大きく詰めてラスト 2F へ。つまり、レイデオロ自身(2 番手以下の馬ほとんど)が歩んだラップはラスト 3F で大きく加速している。先頭比較で 2,3 馬身は差を縮めているので、ここは 11.3 秒前後が妥当。

次にラスト 2F 進入時マイネルミラノがやや抜けており、アルアインが捉えて先頭に。そしてアルアインとの差はほぼ据え置きなので、ここも 11.3 秒前後。

そして、ラスト 1F でアルアインを 1 馬身ちょい程度の差を差しているのも、おおよそ 11.7 秒。全て合わせて上り 34.3 秒となります。

よって当馬の歩んだラップ(2 番手以下の多くが歩んだラップとも言えます)は、ラスト 3F 最速のロンスパに近い内容であり、ラスト 2F 最速ではありません。ラスト 3F 最速のロンスパ戦でラスト 1F も大きく落とさずが本質的にすべき評価です。コーナーで加速できた点も評価。

## 天皇賞秋

12.9 - 11.5 - 11.8 - 11.5 - 11.7 - 11.6 - 11.3 - 10.9 - 11.6 - 12.0

前半-後半 3F : 36.2-34.5

前半-後半 5F : 59.4-57.4

当馬上り 3F : 33.6

同じく超高速馬場。先頭はキセキで隊列は縦長で中団に控えた当馬。

2 秒近いスローペースと落ち着いた前半~中盤。その分レースの動き出しは早くラスト 3F が 10 秒台に入り最速。ラスト 4F でも 11.3 まで入り一段回目の加速をしているので急激な加速を求められたレースではなく、徐々に加速したロンスパ戦。

これを外から上がっていき、差を詰めだしたのはラスト 2F でキセキが減速しだしてから。ラスト 2F-1F 間でキセキとの差をおおよそ 3 馬身程度縮めたので、ここは 11.0 近いラップで、2F 続けてかなり早いラップを踏んでいる。

そして、ラスト 1F で 2 馬身弱差し切って 11.7。つまり、ラスト 3F 10.9-11.0-11.7 が当馬の踏んだラップで上り 33.6 になります。ラストは全馬減速する形で直線で出し切る競馬。

トップスピードも求められましたし、ロンスパへの対応力も問われた中での勝利は後半要素の総合的なレベルの高さが伺えました。

## 京都記念

12.5 - 11.5 - 13.3 - 13.0 - 12.7 - 12.6 - 12.2 - 12.2 - 12.2 - 11.8 - 12.3

前半-後半 3F：37.3-36.3

前半-後半 5F：63.0-60.7

当馬上り 3F：36.4

重馬場で行われた京都記念。中盤までかなり緩んだスローペース。スタートはやや出負けて中団からの競馬に。

ラスト 6F 辺りから捲っていきポジション 4 番手付近まで進出。ここでも 12.2 よりやや早いくらいのラップを踏んでいる事になります。そこからは流れなりの競馬。直線向いてラスト 2F で一度先頭に迫る勢いを見せるも伸びあぐねて 3 着まで。

他馬がラスト 4~5F からのロンスパからの一脚を求められた競馬に対して、当馬はラスト 6F からのロンスパを行った形になったのが最大の敗因。

もう少し突き詰めて考えれば、天皇賞秋・オールカマーはラスト 4F 辺りから段階的に加速してのロンスパ戦で勝利していますが京都記念に関しては、ラスト 6F から淡々とした流れに乗り、直線一脚という競馬でレースラップだけ見れば似たロンスパ戦での敗戦に映りますが、本質的には異なるレース質での敗戦扱い。

まとめると、後半要素ではなく、中盤要素も問われる競馬になってしまったのが敗因。もっと言えばそうせざる得なかったスタートが敗因の大部分と言えます。もちろんラスト 4F 地点まで我慢していればとも言えますが、アルアインと重馬場を考えれば、動く選択はベターですし、結果的にスタートで決まっていたレース。

重馬場で切れ味鈍ったという可能性も捨てきれませんが大部分は上記の理由でしょう。

## まとめ

後半要素の総合力の高さが武器。また、それを中団よりやや前からでも発揮できるのがポイント。後半要素の総合力の高さ×前半中盤要素も水準並に兼ね備えているのが、大崩れしない要因。敗因解説した京都記念を除けば負けた国内戦は後方からになったJCと皐月賞でこれらも上記の理由で説明は付きます。

有馬記念はラスト5F最速でやや早仕掛け+ポジション後ろ目でロンSPAに加えて瞬発力まで求められてしまったのが敗因。

後半要素の総合力の高さが魅力であり、極端な瞬発力勝負では分が悪い相手もいるにはいますが、これは自らが中盤から動いていけば問題ないので、騎乗次第で対処できるので大きな欠点にはなり得ません。

中盤から動けるのか否かのポイントはコーナーで加速できるかのか？と言い換える事もできますが、その点も問題ありません。

負けるのは直線勝負に寄せすぎる騎乗を行った場合と、自身より前に同型がいた場合には、その馬と瞬発力勝負になるので負ける場合ありという具合でしょう。(ブラストワンピースは後者のパターン)

欠点らしい欠点は見えず、何度も言う様に、後半要素は高い次元でまとまっているので、直線勝負でも対応自体はできますし、大崩れはしにくいです。レースメイクできるタイプのルメール騎手は合っていますし、今後も注目。

宝塚記念はひとまずドバイ帰りの状態面の負けでいいと思っています。ドバイも内容はよくありませんでしたし、一先ず静観は必要でしょう。

## 注意点

- ・同型がいた場合は、そちらに妙味？
- ・流れに乗るタイプへの騎手替わりは単危険あり
- ・明らかな前哨戦は余力残しの直線勝負する可能性ありで逃げ先行警戒